

「赤毛のアン」 関連年表

(※訳書見つからず)

	1908	L.M. モンゴメリ "Anne of Green Gables"発表		明治 41 年。第 4 回夏季五輪（ロンドン）、第 1 回ブラジル移民出港、「味の素」特許登録、米 FBI 創設、GM 創業、T 型フォード発売、愛新覚羅溥儀が清の皇帝に即位、「アララギ」創刊。
	1939			村岡花子、離日する宣教師より原書を与えられる。
1	1952	村岡花子	三笠書房	以後、新潮文庫等で 1994 年までの間に 12 種類発刊。 (*1)
2	1957	中村佐喜子	角川文庫	
3	1973	神山妙子	旺文社文庫	
4	1975	猪熊葉子	講談社文庫	※
5	1982	岸田衿子	角川書店	「赤毛のアン—フォトロマン」。底本は「少年少女世界文学全集第 9 巻」（学習研究社/1968）？
6	1987	茅野美ど里	偕成社文庫	
7	1989	石川澄子	角川文庫	※
8	1989	きったかゆみえ	学習研究社	
9	1990	谷口由美子	集英社	※
10	1990	谷詰則子	篠崎書林	1978 年刊の再刊？
11	1992	曾野綾子	河出書房新社	
12	1999	掛川恭子	講談社	
13	1999	山本史郎	原書房	
14	2000	松本侑子	集英社文庫	底本は 1993 年刊
15	2008	村岡花子	新潮文庫	補訳：村岡美枝。現在もっとも普及しているバージョン。
16	2008	村岡花子	講談社	青い鳥文庫
17	2013	柴田元幸	河出書房新社	「書き出し『世界文学全集』」

\*1 「今、私の手元には四十冊以上『赤毛のアン』の本がある（中略）村岡花子の訳が十二種類ある。さて、同じ訳者の本をそんなに集めてどうするんだろうという向きもあるだろう。私もはじめは全部同じ内容かと思っていた。ところが、そうではなかったのだ。いや、実のところ、十二種類全部、文体が違うのだ。これには正直言って驚いた。出版社が違うごとに、というならわかる。同じ出版社でも、収められているシリーズが違えば、全部書き直されているのだ。『赤毛のアン』はまさに、村岡花子が後半生を懸けた、いわばライフワークと言えるものだったのだ」（「やっぱり赤毛のアンが好き」p. 128（松本正司・香織ほか/世界文化社 1994））

## 一 レイチェル・リンド夫人の驚き

アヴォンリー街道をだらだらと下っていくと小さなくぼ地に  
 いる。レイチェル・リンド夫人はここに住んでいた。まわ  
 りには、はんの木がしげり、ずっと奥のほうのクスバート家  
 の森からながれてくる小川がよこぎっていた。森の奥の上流  
 のほうには思いがけない淵や、滝などがあって、かなりの急  
 流だそうだが、リンド家のくぼ地にでるところでは、流れの静  
 かな小川となっていた。それというのも、レイチェル・リン  
 ド夫人の門口を通るときには、川の流れでさえも行儀作法に  
 気をつけないわけにはいかなからである。レイチェル夫人  
 が窓ぎわにすわり、小川から子供にいたるまで通行のもの全  
 部にすべし監督の目を光らせていて、ちょっとでもふに落  
 ちない点やふつこうなところをみつけたが最後、その理由を  
 根ほり葉ほり、さぐりださずにはおかないということ、川  
 の流れのほうでも知っていたのかもしれない。

自分のことはそっちのけにして他人の世話ばかりやいてい  
 る者は、アヴォンリーにかざらずどこにでもいるが、レイチ  
 エル・リンド夫人は自分のしまつはもちろんのこと、そのう  
 えに、他人の世話までやくだけの腕前をもっていた。主婦と  
 しての手腕はたいしたもので、裁縫のつどいを中心ではある

し、日曜学校の経営から外国伝道婦人後援会の重鎮といつた  
 ぐあいでありながら、しかもなお何時間でも台所の窓下にす  
 わって、木綿のさしこの布団をあむ余力があった。「十六枚  
 もつくったんだとさ」とアヴォンリーの主婦たちは声をひそ  
 めて話しあうのだった。それもそのあいだじゅう、このくぼ  
 地からずつとむこうの赤い丘の急な斜面までうねうねとつづ  
 いている街道のほうへ、たえず目をそそぎながらの仕事だか  
 ら驚きいったものである。アヴォンリーはセント・ローレン  
 ス湾に突きでた三角形の小さな半島をしめ、両側に水をひか  
 えているので、ここからは出ていく者もはいつて来る者も、  
 かならずこの丘の道を越えなくてはならないので、しよせ  
 ん、レイチェル夫人のぬけめのない監視をのがれることはで  
 きなかった。

六月のはじめのある日の午後、レイチェル夫人はこうして  
 すわっていた。窓からは陽がさんさんとさしこみ、坂の下の  
 果樹園には、うすもも色の花が咲きひろがり、無数の蜜蜂が  
 ぶんぶん飛びまわっていた。トマス・リンドは——おとなし  
 い小柄な男で、アヴォンリーの人々から「レイチェル・リン  
 ドのご亭主」とよばれていたが、その男が納屋のむこうの丘  
 の畑でおくたのかぶをまいていた。マッシュウ・クスバートは  
 「緑の屋根」のむこうの、広い赤土の畑のかぶはまいてし  
 まったらしかった。前日の夕方、カーモディのウィリアム・

ジャー・ブレアの店でピーター・モリソンに、明日の昼すぎにまくつもりだとマッシュウが話したのをレイチェル夫人はちやんと聞いていたのだからまちがいはない。むろんその話もピーターのほうからたずねたからであって、マッシュウからなにかきりだすなどということは、これまで一度もなかった。それだのにこのいそがしい日の午後の三時半という時刻にマッシュウ・クスパートはゆうゆうとくぼ地をぬけて丘を上って行くのである。そのうしろ白いカラーと、とっときの外出着をきこんでいるところを見ると、どこかよそへ行くことは明らかだった。栗毛の牝馬をつけた馬車を走らせるからには、かなり遠方へ行くにちがいない。いったい、どこへ、なんのために行くのだろう。

これがほかの男ならアヴォンリーのだれであろうとレイチェル夫人は、あれこれと考えあわせて、この疑問をうまくといてしまうのだった。しかしマッシュウときたらめったに家をはなれないから、これはなにか急な異変があったにちがいない。マッシュウのように内気な人間は知らない人を訪ねたり、口をきかなくてはならないところへはいっさい、顔をださうとしないのだから、こうして白いカラーをつけて馬車にのって出かけるのはじつにめずらしいことだった。いくら考えてもなにも推測できず、レイチェル夫人の午後はだいなしになつてしまった。

「お茶のあとで『緑の屋根』へひと走りしてマッシュウがどこへ、何のために出かけて行ったのかマリラからききだし

いった。「こんなところにくらしているのだから、マッシュウもマリラも、変った兄妹さね。木じゃあ話相手にやならないのに、木でよかったら、いやというほどあるけれどね。わたしなら人間のほうがいいな。とにかくあの人たちは満足しきつてゐるんだよ。なれちまつたせいさね。あのアイルランド人のいいぐさじゃないが、なれば首をしめられることだって平気になるといふからね」

こう、いいおわたたときには小径はつきて、「緑の屋根」の裏庭へきていた。裏庭は青々として、きちんとかたづけられていた。いっぽうには大きな柳の古木がたちならび、もういっぽうの側には威風堂々といいたいロムバルディ杉がうわつていた。棒きれ一本石ころひとつ見あたらない。ひとつつてもあつたらレイチェル夫人の目をのがれるはずはなかった。家のなかをはきだすと同じくらい何回でも、マリラ・クスパートはこの裏庭をはくちがいないとレイチェル夫人は考えた。土の上に食事をひろげても、ちりひとつつづけずに食べられるだろうと思われるほどの清潔さだった。

台所の戸をつよくたたくと、おはいりと返事があつたので、レイチェル夫人はなかへ入っていった。「緑の屋根」の台所は居心地よく作つてあつたが、あんまり清潔すぎるためにかえつてふだんつかつてない客間のようなよそよそしい感じがした。東と西に窓があるが、裏庭に面している西側の窓からは、なごやかな六月の日光がふりそそいでいた。青々としたつたがからみついた東の窓をのぞくと、左手の果樹園では白

てこよう」とうとうレイチェル夫人はさじをなげた。「ふつう、いまじぶん町へ行くことはないし、人を訪ねるなんてことはけつしてしない人だし、もしかぶの種がたりなくて買いたしにくいのなら、あんなにめかしこんで馬車を引っぱって行くはずがないし、お医者様をむかえに行くにしては急いでいるようすもなかったし。だが、ああして出かけて行くからには、ゆうべから、なにかおこつたにちがいない。すつかりわけがわからなくなつてしまつたよ、まつたくのところ。何できよう、マッシュウが出かけていくのかわかるまでは、いつときだつてじつとしてられやしない」

そこでお茶がすむとレイチェル夫人は出かけた。道のりはたいしたことはなく、果樹園にかこまれた、だだっぴろいクスパート家はリンド家のくぼ地から街道づたいに行けば、半マイルのまた半分ぐらいの道のりだったが、長い小径があるのでかなりたいくつだった。息子におとらず内気で無口なマッシュウの父は、できるだけ人から遠のいた森のなかへでもひっこみたいところを、その「一歩手前の地所に屋敷をさだめた。その開こん地のはずれに『緑の屋根』の家はたてられて今日におよんだのだが、アヴォンリーの家々が仲よくたちならんでいる街道からはほとんど見えなかった。レイチェル夫人からみるとそんな奥まつたところにいたのでは、住むという意味をなさないのであった。

「ただ、そこにいるってだけのものさ、まつたくのところ」  
轍のあとが深くついている野ばらの小径を歩きながら彼女は

い桜の花がまつさかりだし、小川のほとりのくぼ地では、ほつそりした樺が頭をふつているのが見えた。まぶしい日光をさけたがるマリラ・クスパートはすわるときにはいつもここときめていた。いままも編物をしながらすわっており、うしろの食卓には夕食の支度がしてあつた。

ドアをあけたとたん、レイチェル夫人は、もう食卓の上のものを全部、心におさめてしまつた。皿が三枚ある。するとマッシュウがだれかをつれてお茶にかえつてくるのをマリラは待つているにちがいない。だが料理はふだんのものだし、お菓子も野生りんごの砂糖漬だけしかでていないところをみると、特にたいせつな客というわけでもないらしい。それにしてもマッシュウの白いカラーと栗毛の牝馬はどうしたわけだろう。静かな平凡きわまる「緑の屋根」の家にまつわるこのふしぎななぞはレイチェル夫人にはどうにもとけなかつた。

「今晚は、レイチェル」マリラはてきばきとあいさつした。「まつたく気持ちのいい夕方じゃないの。おかけなさいよ。お宅じゃ、みなさんいかがですなね？」

マリラ・クスパートとレイチェル夫人は気だてがちがつていたにもかかわらず、というよりも、ちがつていたからこそかもしれないが——ふたりのあいだには友情としかいえないようなある感情が、いつまでも交流していた。

マリラは背の高い、やせた女で、まるみのない角ばつたらだつきをしており、白髪のみえはじめた黒い髪をいつもうしろで、かたくひつつめにして、二本のかねのピンでとめて

世界若草文学全集 8

第一回配本

赤毛のアン I

検印  
廃止  
訳者承認

定価 290円  
北海道定価 300円

1959年4月10日 第一刷刊行

訳者 村岡花子

刊行者 竹内富子

発行所 東京都千代田区  
神田神保町2の20 三笠書房  
振替東京22096

乱丁・落丁のものがありましたら、お取り替えいたします

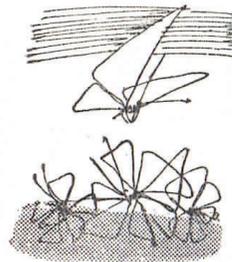
印刷所 堀内印刷株式会社 製本所 徳住製本所 本文  
用紙 本州製紙株式会社特選 クロス  
東洋クロス株式会社特選

感じたこと、考えたこと」をとりだすことをこころみ  
てください。それは、書くことによって果されます。  
よく深く読解することによって、自然にあなたの心  
に浮んでくるそのことをとりだすが、もつともいい  
感想なのです。感想のない読書などは考えられないの  
です。

アンは、一時大学行きを思い止まらなければならな  
くなり、小学校の先生になってじぶんの運命を開拓し  
ていきます。かつてじぶんをみつともない赤毛の子と  
呼んだレイチェル夫人が没落して、マリラと同居する  
ことになり、そのためアンは大学に行けることになり  
ます。小学校の子どもたちは悲しみます。ギルバート  
との清らかなロマンスが、美しい友情から花開こうと  
して忍び寄るようにしずかに近づいてくるのです。ア

ンの成長とその将来をどうしても見きわめないではい  
られないほどの気持になるでしょう。そのことは、も  
はやアンは、あなたの心のなかに生きているしるしで  
す。作中の作られた人物であるはずのアンが、まるで  
実在の人物であるかのように、その将来をあなたが心  
配するようになるというのは、この作品がすぐれてい  
ることを証明するものでしょう。アン・ブックスを続  
いて読んでみてください。

また、たとえば孤児院で十八年間も育ったジュディ  
を扱った『あしながおじさん』や『アンネの日記』の  
アンネやあるいはオルコットの『美しいポリリー』（昔  
かたぎの少女）などくらべて読むこともいいことだ  
と思います。高校生には、そういう作品に扱われている  
主人公を、くらべて考えるという読書に進んでいる  
のも新しい読書興味を拓いていくだろうと思います。



## 2. 中村佐喜子記

父母に捧ぐ

## 第一章 レイチエル・リンド夫人の驚き

レイチエル・リンド夫人は、エヴォンリーの街道が、ちょうど小さい窪地へおりのあたりに住んでいた。まわりはほんの木やさくらなどにかこまれ、奥のカスバット家の森からくる小川が、そこを流れている。この小川は、森をぬける上流の方では、思いがけないと淵や滝があつたりして、あぶなかしい、荒っぽい流れである。けれど、レイチエル・リンド夫人の門口を通るときは、小川でも礼儀作法に気をつけずにいられないらしく、窪地にさしかかる頃は、静かな、とりすました流れになっていた。レイチエル夫人が窓ぎわにいて、小川だろうと子供だろうと、通りすぎるものにはなんにでも眼を光らせ、少しでもへんだと気づいたら最後、そのわけを突きとめずにはおかないということ、たぶん知っているからなのだろう。

自分のことをそっちのけにして隣り近所の人々のすることに熱心になるといふ人は、エヴォンリーにも、またほかにも大ぜいいる。ところがレイチエル・リンド夫人は、自分のこともした上で他人の世話もやけるといふ、そんな腕をもった人であった。主婦としても立派で、家事はなんでも片づけるだけでなく、それを大へん上手に片づけた。お針の集りを開き、日曜学校を手伝い、また教会援護会、伝道師援護会を熱心に世話している。その上なお、台所の窓辺で、もめんのさしこの夜着をさしながら、何時間か坐っている暇があるのだ。——もう十六枚もつくったんだって、と、エヴォンリーの主婦たちはいつもながら感嘆してささやきあうのだが。——しかもその

間に、この窪地から、向うの赤土の急な丘へとうねってゆく街道へ、眼を光らせているのである。エヴォンリーというのは、聖ローレンス湾に突き出た小さい三角の半島にあって、両側には海がせまり、ここから出入りする者はその丘の路を通るほかはなかったから、誰もレイチェル夫人のきびしい監視の眼をのがれられないのだった。

六月はじめのある午後、彼女はそこに坐っていた。温かい陽が窓からさしている。家の下につづく果樹園は、うす桃色の若々しい花ざかり、蜂が無数に、うなりながら飛んでいる。エヴォンリーでは「ミセス・レイチェルの旦那さん」でとおっている、おとなしい小男のトマス・リンドが、納屋の向うの丘の畑で、おくてのかぶの種をまいていた。マッシュウ・カスバートもやはり、かなたの「緑の屋根の家」のわきにある、川床の赤土の大きな畑に、おくてのかぶの種をまくはずである。きのうの夕方、カーモディにあるウィリアム・ブレアの店で、マッシュウがピーター・モリソンにそう話していたのを、レイチェル夫人は聞いていたのである。あしたの午後、かぶの種をまくつもりだ——。それはもちろん、ピーターの方からたずねたのだった。マッシュウ・カスバートは何ごとによらず、自分の方から話し出すことはけっしてない男であった。

ところがそのマッシュウ・カスバートがいま、この忙しい日の午後三時半に、悠然と馬車に乗って、窪地をぬけ、丘へとこのぼってゆくのであった。それが、まっ白いカラーで、晴着を着こんでいるのだから、エヴォンリーからよそへ出て行くことがあきらかだ。栗毛の馬に馬車を曳かせて、よほど遠くへ出かけるらしい。いったいどこへ、なんの用で行くのだろう。

こんな疑問も、もしほかの男だったら、レイチェル夫人はあれこれを器用に考えあわせて、大体正確に当てられたかもしれない。それがマッシュウとなると、まず家を離れることのない人だか

## 2. 中村佐喜子記

ら、あれにはよくよくの事情があるにちがいがなかった。彼は世にもまれなほにかみやで、人中へ出るとか、話をせねばならぬ場所へ行くとかするのがきらいなのである。マッシュウが、まっ白いカラーで盛装したり、馬車を駆ったりするのは、めったにあることではない。レイチェル夫人は考えに考えて、しかも全然とけないので、この午後のさわやかさが台なしになった。

「お茶をすませたら、ちょっとグリーン・ゲイブルズまで行って、あの人がどこへ何しに行っただか、マリラからきき出そう」と、この熱心な夫人はようやく決めた。「まずこの忙しい季節に町へ行くはずはないし、マッシュウがよそを訪問することはけっしてないし。かぶの種が足りないとしても、まさかそれを買いたしに、馬車でめかして行くわけはないし、お医者を迎えに行くというほど急いでもいかなかったようだし。でもとにかく何ごとか、出かける用がゆうべ以来起きたのだろう。まったく面くらわされるじゃないか。なんでマッシュウ・カスバートが、今日エヴォンリーを出て行ったかわからないことには、片ときもおちついていられやしない」

そこでレイチェル夫人は、お茶をすますと出かけた。それほど遠いわけではない。果樹園の中の、だだっ広いカスバートの家は、リンド家の窪地から四分の一マイル足らずである。それがせまい小径で行くので、ずっと遠いような気がするけれども、そもそもマッシュウのお父さんがひどくはにかみやの無口な人だったので、家をたてるとき、森の中まで引っこまないまでも、できるだけ人づきあいのない所にしたのであった。グリーン・ゲイブルズは彼の開墾地のはずれにたてられて、そのまま今日に及び、エヴォンリーのほかの家々のかたまっている街道からは、ほとんど見えなかった。こんなところの生活は、レイチェル夫人に云わせれば、全然「生活している」ことにならなかった。

## 中村佐喜子

明治四三年（一九一〇）一。札幌に生る。本姓石川。札幌高女、日本女子大学本科英文学部卒業。その後小説を書き始め、昭和十七年『雪のりんご畑』で改造社の文芸推薦を受け、つづけて二三作発表したが、戦争激化とともに中止した。戦後翻訳に従事。（主訳書）モーム『作家の手帖』、ヴァーヅニア・ウルフ『燈台へ』、デュ・モオリア『メアリ・アン』、モンゴメリ『赤毛のアン』、『アンの青春』、『アンの婚約』等。

\*印 角川文庫所収

## 2. 中村佐喜子訳

昭和三十二年十一月三十日 初版発行  
昭和四十九年十二月三十日 三十二版発行

定価は、カバーに  
明記してあります

角川文庫  
あかけ  
赤毛のアン



訳者 中村佐喜子  
発行者 角川源義  
印刷者 中内あき子  
東京都豊島区高田一ノ十二

発行所 東京都千代田区富士見二ノ十三  
株式会社 角川書店  
電話東京(265)七三二(大代表)

落丁・乱丁本はお取替えいたしません

Printed in Japan 中光印刷・多摩文庫  
0197-217901-0946(3)

### 3. 神山妙子記

7

第一章 レイチェル・リンド夫人驚く

レイチェル・リンド夫人の住居は、ゆるやかに下りてきたアヴォンリー街道が、小さな窪地に達する地点にあった。まわりはほんの木やフクシャに囲まれ、ずっと奥のカスバート家の森から流れってくる小川がそこを横切っていた。森をぬける上流の方には、黒ずんだ淵や滝がひそんでいることもあって、相当いりくんだ、手に負えない流れといわれていたが、「リンドの窪地」にくるころには、静かな、非のうちどころのない小川になっていた。小川でさえ、礼儀作法を無視して、レイチェル・リンド夫人の門口を流れることはできなかったからだ。レイチェル夫人が窓ぎわにすわって、小川から子供に至るまで、通り過ぎるすべてのものに油断のない眼をそそぎ、ちょっとでもおかしなことや、ふにおちない点を見つけると、とことんまでそのわけを探りださずにはおかないということに気づいていたのかもしれない。

アヴォンリーに住もうと住むまいと、自分のことは棚にあげて、近隣の世話やきに熱中する人は数多いが、レイチェル・リンド夫人ときたら、自分のことはちゃんと始末した上に、他人のことにまで手をのぼすことができるような遣り手だった。主婦としても見上げたもので、家事の手を抜くようなことは一切しない上に、どれも手際よくやってのけた。裁縫のサークルを切り回し、教会学校の運営を手伝い、教会援護会や、外国伝道後援会などの最有力者として活躍していた。しかもこんな忙しいうちに、レイチェル夫人は台所の窓辺に何時間もすわって、木綿のさしこのふと

幸せの星が天宮に会し  
精と炎と露もて汝を作れり

——ブラウニング——

#### 第一章 レイチェル・リンド夫人驚く

をあてながら、窪地を通り過ぎ、丘を上って行くではないか。おまけに、白いカラーをつけて、一帳羅いっちょらちを着ているのは、アヴォンリーから出かけて行くことの何よりの証拠だった。それに、栗毛の雌馬にひかせた馬車に乗っているのは、かなり遠くまで行くことを示していた。いったいマッシュ・カスバートはどこに行くのだろう、それも何しに行くのだろうか？

これでもアヴォンリーのほかの男だったら、レイチェル夫人は、あれこれをうまくつなぎ合わせて、この二つの間いにならちがった答をだせたかもしれぬ。しかし、マッシュウが出かけるのはめったにないことだったので、こうして出かけるのはよくよくのことであり、何かさせまつたことが起こったにちがひなかった。マッシュウは無類のはにかみ屋で、知らない人たちの集まりや、口をきかなくてはならない所へ出かけて行くのが大嫌いだ。マッシュウが白いカラーで着飾って、馬車を駆って行くというのはいかにも珍しいことだった。レイチェル夫人はいくら考えてもさっぱりわけがわからなかった。おかげで午後の楽しみはだいにされてしまった。

「お茶を飲んだら、ちょっと『グリーン・ゲイブルズ』に行つて、マリラから、あの人がどこに何しに行つたのか聞き出してこよう」とついにこのえらい婦人は決心した。「マッシュウは今時分はたいがい町に行かないし、人を訪問することは絶対ない。もし、かぶの種が切れたんだしたら、それを買いにわざわざ着飾って、馬車に乗って行つたりはしないだろう。医者を呼びに行くにしては、馬車の速度がのろい。でも、ああやって出て行くところを見ると、昨晚以来、きつと何かあったのだろう。何が何だかさっぱりわけがわからない。マッシュウ・カスバートが今日、なぜアヴォンリーから出かけて行つたのかわかるまでは、わたしは午後も落着かないよ」

んを作るひまにことかかなかった——もう十六枚も作り上げたそうだというのが、アヴォンリーの主婦たちのひそひそ話の種だった——しかもそのかたわら、窪地を横切つて、向こうのけわしい赤い丘を曲がりくねって上つていく街道を油断なく見張ることもやつてのけた。アヴォンリーは、セント・ローレンス湾セント・ローレンス湾に突き出ている小さな三角形の半島にあり、両側が海だったので、ここから出て行く者も、また入つて来る者も、その丘の道を越える羽目になり、どうあつてもレイチェル夫人のきびしい監視の目からのがれることはできなかった。

六月のはじめのある午後、彼女はそこにすわっていた。窓からは暖かな日の光がさんさんとさしこんでいたし、坂の下の果樹園では、うすもも色の花が今を盛りと咲き誇り、無数の蜜蜂がぶんぶんいっていた。トマス・リンド——アヴォンリーの人達が「レイチェル・リンドの旦那さん」と呼んでいるおとなしい小男——は納屋の向こうの丘の畑で、おくてのかぶの種をまいていた。マッシュウ・カスバートも、ずっと向こうの「グリーン・ゲイブルズ」(緑の切妻)のそばの、広い赤土の川べりの畑で、かぶの種をまいているはずだった。前の晩、カーモディのウィリアム・ジェイ・ブレアの店で、マッシュウがピーター・モリソンに、あすの午後、かぶの種をまくつもりだと話しているのをレイチェル夫人はちゃんと聞いていたのだ。もちろん、この時はピーターの方からたずねたのだった。マッシュウ・カスバートときたら今まで一度だつて自分から進んで話をしたことはなかった。

ところが、その忙しい日の午後三時半というのに、当のマッシュウ・カスバートが悠然と馬にむち

(1) 大西洋北部のカナダ沿岸の湾。

### 3. 神山妙子記

#### 「旺文社文庫」刊行のことば

いかなる時代においても、書物は人間の最大の喜びであり、最高の救いである。若い日読んだ書物は、人間の生涯にわたって影響をあたえ、第二の天性となり、人格となるであろう。

かかる観点から旺文社は、若き世代のための出版社としての使命感にたつて、ここに旺文社文庫を刊行する。内容は、洋の東西にわたり、時代の古今をたらぬき、文学・科学・伝記・随筆・思想、万般におよび、いやしくも知識人たらしめんとする者が、生涯の教養の基盤として、若い日一読すべき価値のあるものを可及的に多く刊行せんとするものである。

読むに価値あるものを、でき得るだけ楽しく、消化しやすく、読みやすく提供することは出版社の義務である。出版道義を強く信奉せんとしているわが社は、この目的にひたむきに献身するものである。あえてわが社の志を理解されご支援あらんことを。

旺文社社長 赤毛 正博

〔編集顧問〕 小田切進 茅 誠司 木村 毅  
中島健蔵 森戸辰男 (五十音順)

旺文社文庫 赤毛のアン 定価はカバーに表  
示してあります



昭和48年7月1日 初版発行  
昭和49年6月1日 重版発行  
訳者 神山 妙子  
発行者 鳥居 正博  
印刷所 慶昌堂印刷株式会社

発行所 株式会社 旺文社  
162 東京都新宿区横寺町  
電話 東京(03) 267-1111〔代〕

〔中村印刷・清水印刷・穴口製本〕

0197 | 621-58 | 0724 902029 © 神山妙子 1973  
(許可なしに転載、複製することを禁じます)

〔訳者紹介〕 神山妙子(かみやま・たえこ)。青山学院大学教授。東京生まれ。東京女子大学英語専攻部、ウエスタン・メリーランドカレッジ、ボストン大学卒。主要論文「エリザベス・ボーエン」、「ヴァージニア・ウルフ」、「リットン・ストレットチー」、「サミュエル・ジョンソン」ほか。翻訳『ジェーン・エア』、『クリスマス・カロール』(旺文社文庫)。

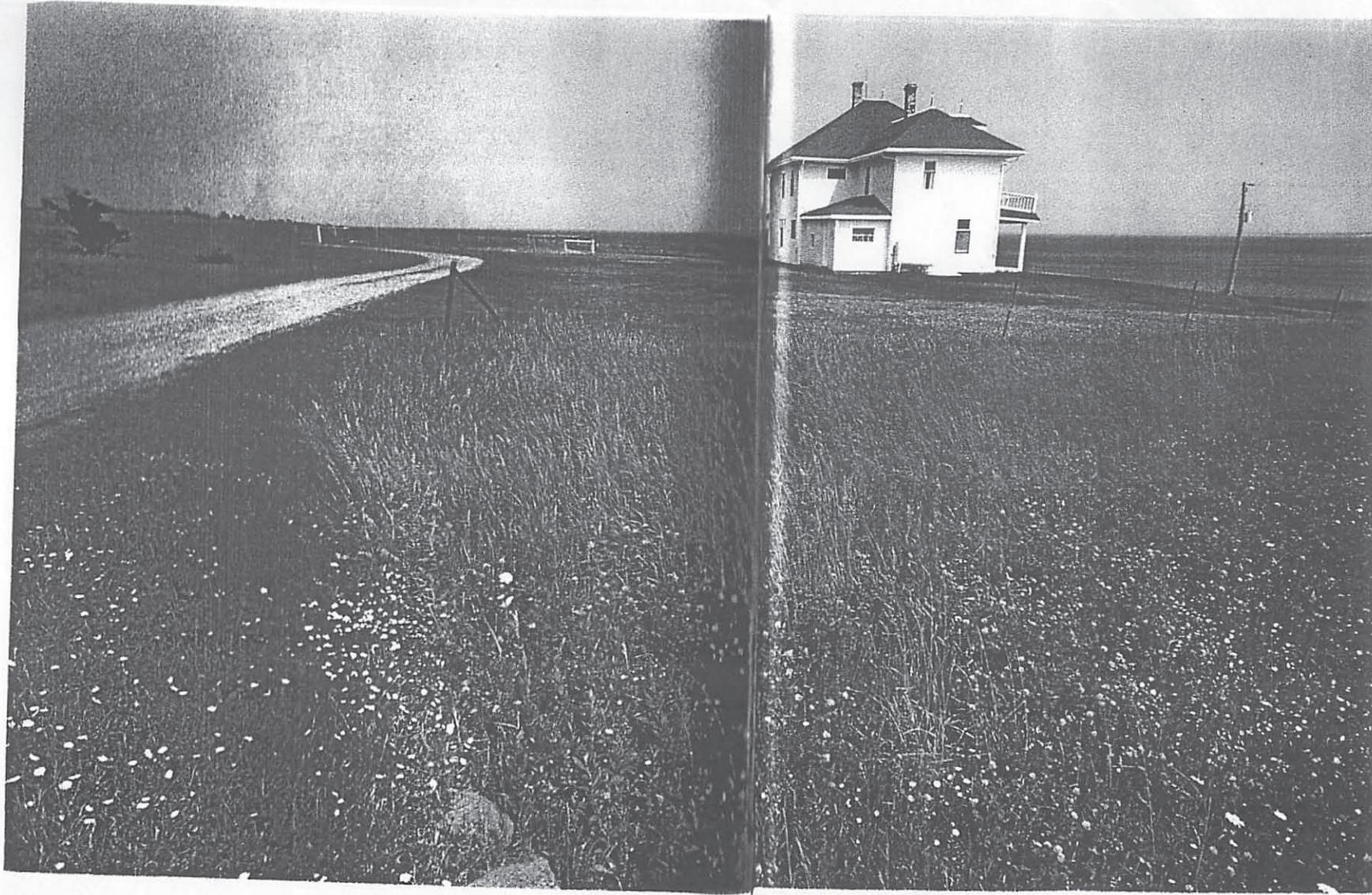
落丁・乱丁・不良本はお取り替えます  
本社に直接お申し出ください



アボンリー街道を行くと、だんだん下り坂になって、小さな窪地に出る。レイチェル・リンド夫人は、そこに住んでいた。

周りは、ハンノキやツリウキソウの繁みに囲まれ、ずっと奥のカスバト家の森から流れ出た小川がよこぎっていた。森の奥深くわけ入って、上流へ出ると、だれも知らない淵や、滝がかくされていて、なかなか手ごわい谷だということだが、レイチェル夫人の窪地へくるころには、静かな、行儀のいい流れになっていた。

レイチェル夫人の家の前を通るときには、川でさえ、無作法に流れるわけにはいかないだろう。レイチェル夫人が窓ぎわにすわり、小川でも、子どもでも、そこを通るものすべてに目を光らせて、ちよつとでもおかしな、なつとくできないものを見つけたら、とことんその理由をさぐり出そうとするのを、小川も知っていたのだろう。



アホンリーは、セント・ローレンス湾に突き出た小さな三角形の半島で、両側は海だったから、ここから出て行く人も、入ってくる人も、かならず、この丘の道を越えなければならなかった。だから、レイチェル夫人のきびしい見張りの目を逃れることはできなかった。

第一章

レイチェル = リンド夫人<sup>ふじん</sup>びっくりする



レイチェルはリンド夫人<sup>ふじん</sup>は、アボンの街道<sup>かいどう</sup>ぞいの小さなほ地に住んでいた。あたりにはハンノキや小さな野の花がはえていて、そのあいだを、ずっとおくの、カスバート家<sup>け</sup>の古い農園裏<sup>のうえんうら</sup>の林から流れだした小川<sup>おがわ</sup>がよこぎっていた。この小川<sup>せうがわ</sup>は上流<sup>じょうりゅう</sup>の林のなかでは流れがはやくて、くねくねと入りくみ、暗い<sup>くら</sup>淵<sup>ふち</sup>や小さな滝<sup>たき</sup>をいくつもつくっていたが、リンド家<sup>け</sup>のくぼ地にたどりつくころには、静かな行儀<sup>ぎょうぎ</sup>のよい小川<sup>せうがわ</sup>になっていた。レイチェルはリンド夫人<sup>ふじん</sup>の門口<sup>かどぐち</sup>を通るからには、小川<sup>せうがわ</sup>でさえも、行儀作法<sup>ぎょうぎさくぽう</sup>を無視<sup>し</sup>するわけにはいかないのだった。レイチェル夫人<sup>ふじん</sup>は、よく窓<sup>まど</sup>べにすわって、小

さし絵・東逸子<sup>あずまいつこ</sup>

川がわのようなものから子どもにいたるまで、家の前を通るものはなにひとつ見のがすまいと、目を光らせていた。なにかちよつとでもおかしいことや、いつもとちがうことに気がついていたら、そのわけをつきとめるまでじつとしてはいられないのだ。そのことを小川おがわも知っていたのかもしれない。

アボンリーの住民じゅうみんにかぎらず、自分のことをほったらかしにして他人たにんの世話せわばかりやきたがる人はよくいるが、レイチェル・リンド夫人ふじんは、自分の仕事しごともきちんとやって、しかも他人のめんどうもみるといふ芸当げいとうのできる人だった。家事かじは万事ばんじそつなくこなし、なにごとともてきばきかたづけける。そのうえ、裁縫さいほうサークルを指揮しきするのも夫人ふじんだったし、日曜にちよう学校の運営うんえいにも手をかし、教会婦人会きようかいふじんかいと外国伝道互助会がいこくでんどうごじよかいの最強メンバーのひとりでもあった。

これだけのことをしながらなお、レイチェル夫人ふじんは、何時間なんじかんも台所だいどころの窓まどべに腰こしかけて、くぼ地くぼちをよこぎって向こうきゆうの急な赤い色の丘おかへつづいてはいる街道かいどうに目を光らせつつ、木綿もめんのキルティングぶとんをぬうということまでやってのけるのだった。十六枚まいもぬいあげたというので、アボンリーの主婦しゆふのあいだで評判ひやうばんになったほどだった。

アボンリーの村は、セント・ローレンス湾わんにつきだした小さな三角形さんかくけいの半島はんとうにあつて、

両がわを海にはさまれている。そんなわけで、出入りにはどうしても丘おかの街道かいどうを通らねばならず、つまりは、だれもレイチェル夫人ふじんのきびしい監視かんしの目をのがれるというわけにはいかないのだった。

六月のはじめのある午後のこと、夫人ふじんはいつものように窓まどべにすわっていた。

窓まどからはあたたかな明るい日ざしがふりそそぎ、リンド家けの下の斜面しゃめんにある果樹園かじゆえんにはうすもも色の花が咲さきみだれ、ミツバチがブンブン音をたてて群むれ飛とんでいた。トーマス・リンドが（小がらな、おとなしい男で、アボンリーの人たちにヘレイチェル・リンドのご亭主ていしゆ）とよばれていた）、納屋なやの向こうの丘おかに遅おそまぎのカブラの種たねをまいていた。

マッシュー・カスバートもいまごろは、緑アグリーン・グレイブルズの切妻屋根おその、川ぞいの広い赤土あかつちの畑はたけで、おなじようにカブラの種たねをまいているはずだ、とレイチェル夫人ふじんは思った。前日ぜんじつの夕方、カーモディーにあるウィリアム・J・ブレアの店みせで、マッシューがピーター・モリソンに、あすの午後、カブラの種たねをまくつもりだ、といったのをきいていたからだ。マッシュー・カスバートは、自分からすすんで人に話しかけることのけつしてない男おとこだったので、これはもちろん、ピーターの質問しつもんにこたえていたのだ。

それなのにどういふわけか、いそがしいはずの午後三時半に、マッシュー・カスバートが

## 6. 茅野美ど里 訳

訳者 茅野美ど里 (ちのみどり)  
1954年東京に生まれる。上智大学外国語学部  
英語学科卒業。小・中学時代の3年あまりを  
アメリカのイリノイ州で過ごした。訳書に  
『赤毛のアン』『アンの愛情』『秘密の花園』  
『パパのさいごの贈りもの』『アイディアファ  
クトリー』『大空の殺人』『オリエント急行殺  
人事件』などがある。

偕成社文庫 3148

小学上級から

赤毛のアン (上)

NDC 933 328P 19cm

1987年9月 1刷  
2002年9月 17刷



作者 モンゴメリ  
訳者 茅野美ど里

発行者 今村正樹

印刷所 新興印刷製本株式会社

発行所 株式会社 偕成社

東京都新宿区市谷砂土原町3-5  
〒162-8450

© Midori CHINO 1987 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取替いたします

ISBN4-03-651480-6

小社は平日も休日も24時間、本のご注文をお受けしています。  
Tel: 03-3260-3221 Fax: 03-3260-3222 e-mail: sales@kaiseisha.co.jp

314

シーザーの死体を前にした……シエイクス  
ピア(一五六四〜一六一六年)の戯曲『ジュリ  
アス・シーザー』の一節。ローマ時代、王位  
への野心をもつ政治家シーザーが、反対派の  
キャシアスやブルータスによって暗殺される。  
シーザーの死体を前に、アントニーは巧妙な  
演説をおこない、ローマ市民を暗殺者たちへ  
の反逆に立ちあがらせるといふ部分。

290

偽膜性喉頭炎 子どもののどや気管をおかす  
炎症。はげしいからぜぎと、呼吸困難をとも  
なう。

## 1 レイチェル・リンド夫人、びっくりする

レイチェル・リンド夫人の住まいは、アボンリー街道にそつた、小さなくぼ地にあつた。あたりをハンの木立がかこみ、ずっと奥にあるカスバート家の林から流れてくる小川が、横ぎつていた。

この小川は、上流のほうでは流れがはやく、小さな滝や淵をいくつもつくっているが、リンド家のくぼ地に出るころには、ゆるやかな流れに変わつていた。レイチェル・リンド夫人の玄関先を通るときには、川の流れてさえも、ぎょうぎよくしなければならぬからだった。

レイチェル夫人は、いつも窓べにすわり、小川でも子どもでも、通るものみんなに、するどい目を光らせていた。納得できないことや、なにかおかしなことを見つけると、その理由をとことんさぐりださずにいられないのだ。そのことを、小川も知っているのかもしれない。

自分のことをなおざりにして、人の世話ばかりやく者はたくさんいるけれど、レイチェル・リンド夫人には、自分の仕事をきちんとなし、そのうえに他人のめんどうまでみるだけの才覚が

原著者名

Lucy Maud Montgomery

原題

Anne of Green Gables

あつた。家事にも万能で、裁縫サークルを指揮するかと思えば、日曜学校の手伝いにも精を出すし、教会婦人会の中心としても活躍している。それでいて、台所の窓口に何時間もすわり、キルティング(布の間にしんや綿を入れ)のふとんをぬう余裕があつた。

縫い物ものをしているあいだも、リンド夫人は、くぼ地からずつと向こうの、赤い急な丘までうねうねとつづく、アボンリー街道のほうへ目をくばることをおこたらなかつた。

アボンリーの村は、セント・ローレンス湾につきでた三角形の小さな半島にあり、両側を海にはさまれているので、村の出入りには、必ずこの丘の道をこえなくてはならない。そのため、だれひとりとして、レイチエル夫人の目をのがれることはできなかつた。

六月初めのある午後、レイチエル夫人は、いつものように窓べにすわっていた。窓からは日が見え、さんさんとふりそいでくる。坂の下の果樹園には、うすも色の花が咲きみだれ、ミツバチがブンブン飛びまわっていた。

納屋の向こうの畑では、トマス・リンドが——小がらなおとなしい男なので、アボンリーの人たちからは「レイチエル・リンドのご亭主」と呼ばれている——、奥手(野菜や果物で、おそくてできる品種)のカブの種をまいていた。

今ごろは、マシュー・カスバートも、(グリーン・ゲイブルズ)の先にある、広い赤土の畑にカブの種をまいているはずだわ、とレイチエル夫人は思った。きのうの夕方、カーモディにあるウィリアム・

ブレアの店で、マシューとピーター・モリソンが話していたのを、夫人は小耳にはさんでいたのだ。あのとき、マシューは、「あしたの昼すぎに、カブの種をまくつもりだ。」と、話していた。もちろん、これはピーターにたずねられて答えたもので、マシュー・カスバートが、自分のほうから他人に話しかけることなど、これまでにならなかつた。

それなのに、午後三時半というこの忙しいときに、マシューが、のんびりとくぼ地をぬけて、丘をのぼっていくのが見える。白いカラーをつけ、よそゆきのスーツを着ているからには、町へ出かけるのはまちがいない。しかも、栗毛の馬をつけた馬車に乗っているの、かなり遠くへ行くらしい。

(お茶のあと、グリーン・ゲイブルズまでひとつ走りして、マシューがどこへ、なんのために出かけたのか、マリラにたずねてみなくちゃ。) ついに、レイチエル夫人は心を決めた。(ふつう、マシューはこの時期には町へ行かないし、決して人をたずねたりしないのに。カブの種を切らして買に行くのなら、あんなにめかしこんで、馬車に乗るはずもないし、お医者呼びに行くにしては、のんびりしすぎてる。でも、ああして出かけるんだもの、きつとなにかあつたのね。まるでちんぷんかんぷんだわ。)

そんなわけで、レイチエル夫人は、お茶のあとで家を出た。たいした道りではない。果樹園にかこまれた、だだっぴろいカスバート家までは、リンド家のくぼ地から街道づたいに歩いて、

## 8. きったかゆみえ記

訳者紹介

きったか ゆみえ

広島県に生まれる。同志社大学文学部卒業。主な訳書に、『ベスト・キッド』『ベスト・キッド2』『ビジョン・クエスト／青春の賭け』『V』『恋しくて』『長くつ下ピッピの冒険物語』などがある。

フォア文庫

<http://www.4bunko.com>

この文庫は、岩崎書店、金の星社、童心社、理論社の四社によって協力出版されたものです。

ISBN4-323-01068-0 NDC933・173×113

赤毛のアン

1989年6月 第1刷発行

2006年2月 第41刷発行

著者 L・モンゴメリ

訳者 きったか ゆみえ

画家 頓田室子

発行 株式会社 金の星社

東京都台東区小島1-4-3

☎03(3861)1861・FAX03(3861)1507

本文・三浦企画印刷/カバー・広研印刷/製本・東京美術紙工  
落丁・乱丁本はおとりかえいたします。

©1989 Yumie Kittaka, Sayako Tonda. Printed in Japan

ホームページ <http://www.kinnohoshi.co.jp/>

も、きつとなじみ深いことでしょう。わたしも大好きでしたし、このたび、新しく訳してみても、さらに新鮮な発見がありました。一人でも多くの方に読んでいただきたいと思

写真提供/篠崎書林



キャベンディッシュにあるグリーン・ゲイブルズ

ろがあります。ある意味で、モンゴメリは生涯をアンとともに生きた、ともいえるのかもしれない。

モンゴメリは、一九四二年四月二十四日、六十七歳で永遠の眠りにつきました。なきがらは、『赤毛のアン』の舞台になったキャベンディッシュの丘の墓地に葬られました。生前こよなく愛した土地に、いまでも丘の上から、やさしい心のまなざしを、そそぎつつづけているかのようなです。

『赤毛のアン』は、いつもかわることなく読者を魅了し、一人一人の胸のなかで永遠に生きつづけることでしょう。

良き運勢に恵まれて、

汝は精霊と火と露から造られり

——ブラウニング

## 第一章 レイチエル・リンド夫人の驚き

レイチエル・リンド夫人は、昔からカスバート一家が所有している遠い森から流れ出る小川が横切る、ハ  
ンノキやサクラソウに囲まれた小さな窪地に向かってエイヴォンリー街道がちょうど下り坂になる所、そん  
な所に住んでいた。森の中にあるこの小川の上流は、淵や滝といった、ほとんど人に知られていない秘密の  
ある、入り組んだ激流ということだった。けれども、リンド家の窪地に流れ込むまでには、静かで行儀の良  
い小さな流れになっていた。なぜなら、小川でさえ礼儀作法に充分気をつけずに、レイチエル・リンド夫人  
の戸口を通り過ぎることはできなかったからだ。たぶん小川は、リンド夫人が小川から子供まで、そこを通  
るあらゆるものに鋭い眼を光らせながら窓辺にすわっていて、もし何か妙なことや変わったことに気づいた  
ら、その理由をさぐり出すまで、決しておさまらないということを知っていたのだろう。

自分の務めをないがしろにすることもつばら隣人たちの世話をやく人なら、エイヴォンリーの内外を問  
わず大勢いる。ところが、レイチエル・リンド夫人は、自分のことは自分でした上で他人の世話をやく力量  
の持ち主の一人だった。働きの遣り手の主婦で、なすべきことは、いつでも、申し分なくやっていた。  
自ら裁縫の会を開き、日曜学校の運営を手伝い、さらに教会の外国伝道慈善婦人援助会の最も有力な擁護者  
でもあった。しかも、これらすべてをこなす傍ら、綿糸を縦糸にした刺し子の夜着をさしながら——「十六  
枚もこしらえたのよ」と、エイヴォンリーの主婦たちが畏敬に満ちた声でいつも言っていたが——窪地を通

つて向こうの急勾配の赤い丘をうねって行く街道に、鋭い眼を光らせ、台所の窓辺に何時間もすわっていらる。あり余るほどの時間を見つけたでいた。エイヴォンリーはセント・ローレンス湾に突き出た小さな三角形の半島を占めていて、その両側が海なので、ここに入入りする者はその丘の道を通らなければならなかったため、レイチエル夫人の千里眼の目に見えない攻撃を、逃れることはできなかったのだ。

六月初めのある午後のこと、夫人はいつもの場所にすわっていた。日は暖かくさんさんと窓から差し込み、家の下方の斜面にある果樹園は、白と見粉うほど、ほのかな薄桃色の花々の、花嫁のようなういしい輝きに包まれ、無数の蜜蜂がぶんぶん羽音を立てて飛び交っていた。トマス・リンド、つまり「レイチエル・リンドのご主人」とエイヴォンリーの人々が呼んでいる穂和で小柄な男のことだが、このトマスは、納屋の向こうの丘の畑で遅まきのカブの種をまいていた。そして、マシユウ・カスバートが、はるか彼方の「緑の切妻屋根」の傍にある川原の赤土の大きな畑で、種まきをしているはずだった。レイチエル夫人は、前の日の夕方、カーモデイにあるウイリアム・ジェイ・ブレアの店で、明日の午後、カブの種をまくつもりだとマシユウがピーター・モリソンに言うのを耳にしたので、当然そうしているはずなのを知っていた。もちろん、ピーターがマシユウに聞いたのだ。というのも、マシユウ・カスバートはこれまで、何事であれ、自分から話を切り出したためしなかったのだから。

ところが、そのマシユウ・カスバートが、忙しい一日の午後三時半に、落ち着きはらって馬車に乗り、窪地を抜けて丘を上って行ったのだ。その上、白いカラーをつけて一番良い服を着ているので、エイヴォンリーの外に出かけることは歴然としていた。しかも、栗毛の牝馬に馬車をひかせていることが、かなりの速出であることを物語っていた。さて、マシユウ・カスバートは、いったい、どこへ、何のために行くのだろう。もし、これがエイヴォンリーの誰かほかの男でありさえすれば、レイチエル夫人はあれやこれやを器用に

考え合わせて、この二つの疑問に関して、かなり真相に迫る推理ができたかもしれない。しかし、マシユウはめったに家を離れたことがないので、これは何か差し迫った異変があったに違いない。前代未聞の内気な人で、見知らぬ人々の中に入ったたり、人と話さなければならぬような場所に出されるのをとても嫌っている。そのマシユウが、白いカラーをつけ盛装して馬車で出かけるなんて、まずないことだ。レイチエル夫人は思案を重ねたが、いったいどういうことなのか、皆目、見当もつかなくて、楽しいはずの午後がだいなしになってしまった。

「お茶をすませたら、ちよつとグリーン・ゲイブルズまで行って、マシユウがどこへ、何しに行ったのか、マリラから聞きだそう」とこの賞賛すべき夫人は、とうとう心を決めた。「マシユウがこの時期に町へ行くなんて、普通はまずないし、人を訪ねるなんてことは、あろうはずがない。カブの種が足りなかったにしても、晴れ着をきて馬車で買い足しに行きはしないだろう。医者を呼びに行くほど飛ばしてもいなかったな。でも、マシユウがどうしても発たなきやならない何か、昨夜来、起こったにちがいない。全然わからないね、まったく。なぜ、今日、マシユウ・カスバートがエイヴォンリーから出て行ったのかわかるまでは、片時も落ち着いてなんぞいられやしない」

それで、お茶を済ますと、レイチエル夫人は出掛けた。長い道のりではなかった。カスバート家の住む果樹園に囲まれた大きく不格好な家は、リンド家の窪地から街道を四分の一マイル足らず行った所にあつた。確かに、街道から家までの長い小道が、道のりをずつと遠く感じさせはしたが、マシユウ・カスバートの父親というのが、その性格を譲り受けた息子と同じくらい内気で無口な人で、家を建てる時に、実際に森の中に引き籠ってしまわぬまでも、できるだけ隣人を避けようとしたのだった。こうしてグリーン・ゲイブルズは開墾地の外れに建てられ、今日にいたり、ほかのエイヴォンリーのすべての家々がかたまつて立ち並んで

いる街道からは、ほとんど見えなかった。レイチェル・リンド夫人は、こんな所に住むのでは生活していることにならないと思った。

「ただ居るといっただけよ、まったく」と、野バラの茂みに縁どられた轍の深い草むす小道を歩きながら、彼女は言った。「マシユウもマリラも、二人とも確かにちよつと変わっているわ。二人きりで、こんな人里離れた所に住んでいるんだから。木々とはあまりつき合ひようがないでしょうに。木とつき合えるなら、そりゃたしかに充分あるけど。私なら、人を見ている方がいいわ。なるほど、あの二人は充分満足しているよ。うだけど、まあそれも慣れでしょうよ。アイルランド人が言ってたけど、人間は何にでも、吊るされるのにさえ、慣れられるってね」

こう言いながらレイチェル夫人、小道からグリーン・ゲイブルズの裏庭へと足を踏み入れた。裏庭は、背々として、こぎれいで、整然としていた。片側には壮大な柳の老木、もう一方には、形のよい西洋箱柳が、ここかしこに植えられていた。ぼつりと落ちた小枝一本、あるいは石ころ一つ、見当らなかつた。というのも、もし、そんなものがあるものなら、レイチェル夫人が見落とすはずもなかつたのだから。マリラ・カスバートが家と同じくらい頻繁に、この庭を掃除するのだ、というのが夫人がひそかに抱いた見解だった。地面に料理を広げたって、名うての土ほこりにすっぽりおおわれぬ食事をとることができらうよ。

レイチェル夫人は、台所の戸を気ぜわしく、とんとたたき、声を待つて中に入った。グリーン・ゲイブルズの台所は気持ちよい部屋だった——というか、むしろ、もし気が詰まるほど清潔なせいで、多少、使われていない客間を思わせるといふふうでなかつたら、もつと居心地良かっただろう。東西に窓があり、裏庭に面した西窓から、柔らかな六月の日差しがあふれんばかりに差し込んでいた。けれども、左手の果樹園の白い花が真つ盛りのサクラの木々や、小川の傍の窪地で揺れている細い白樺の木々が見える東窓は、からみ

合うツタの縁におおわれていた。マリラ・カスバートは、常日頃、日光を信頼しきつていなかったもので、すわるのはいつもこちらだった。日光は、舞い踊つてばかりいて、真面目にとられるよう、もくろまれた世界に、なんの責任も負わぬもののように思われた。マリラは今もそこに、編み物をしながらすわつており、後ろのテーブルには夕餉の支度がしてあつた。

レイチェル夫人は、戸をびつたりと閉めないうちに、テーブルにあるもの全部を心に書きとめた。お皿が三枚、ということ、マリラはマシユウと一緒に誰かがお茶に来るのを待っているに違いない。でも、お皿はふだん用だし、野リンゴの砂糖煮とケーキが一種類あるだけだから、その待ち人は特別な客のはずはない。それにしても、マシユウの白いカラーと栗毛の牝馬は、いったいどうしたことだろう。レイチェル夫人は、静かで隠し事のまったくないこのグリーン・ゲイブルズにまつわる、いつにないこの謎に、すっかり惑わされていた。

「今晚は、レイチェル」とマリラは、きげんよく言った。「本当に気持ちいい晩ね。おかけになつて。お宅の皆さん、お元気？」

マリラ・カスバートとレイチェル夫人とが、似ていないにもかかわらず——あるいは、たぶん、似ていないからこそ——他に言いようがないので、友情と呼ぶしかなさそうなので、二人の仲は、今までずっと続いていた。

マリラはこつこつとした丸味のない背の高いやせた女で、白髪まじりの黒髪は、いつも固い小さなだんごに丸められ、二本のかねのヘアピンが、ぐさつとさしてあつた。いかにも、狭い経験と、堅苦しい道義心の持ち主のように見え、事実は、また、その通りだった。しかし、口のあたりに美点があつて、それがもうほんの少しでも發揮されたら、持ち前のユーモアのセンスの現われと見なされたかもしれぬ。

## 第一章 レイチェル・リンド夫人は驚く

レイチェル・リンド夫人は、アボンリーの街道が小さな窪地くぼちにおりていくところに住んでいた。

まわりにはハンの木が茂り、奥のカสบート家の森のむこうから流れている小川がある。森の奥の川上には、入りくんで、急な淵や滝があり、急流だといわれていたが、レイチェル・リンド夫人の家の前を通るころには、小川でもお行儀に気をつけなければならぬらしく、静かな流れになるのだった。

レイチェル夫人は窓際に座って、小川にも子供にも、通りかかるものすべてに目を光らせていた。そして、少しでも変なことに気がつくとき、彼女はそのわけを気の済むまで聞き正さなければ承知しないことを、川のほうでも知っていたのかもしれない。自分のことは柵にあげて、ひとのことばかり気にする人達というのは、アボンリー

ばかりでなくどこにでもいるものだが、レイチェル・リンド夫人は自分に限らず、人の世話まで焼けるという有能な人物だった。主婦としても所帯持ちがいいし、裁縫のサークルでも中心になり、日曜学校の経営から外国伝道後援会の仕事でも、皆に頼られていた。

しかも何時間も台所の窓下に座って、悠々と木綿もめんの刺し子布団を編む時間をひねりだしていた。——「十六枚も作ったんですって！」と、アボンリーの主婦たちは感心してさきやきあっていたが、その間中、彼女はこの窪地から、むこうの赤い丘の急な斜面へうねうねと続く街道に、目を配っていたのである。

アボンリーは、セントローレンス湾に突き出た三角形の小さな半島にあって、両側に海が迫っているのです。ここから出入りする人は、この丘の道を通らなければならなかったから、レイチェル・リンド夫人の厳しい監視を避けられる人はなかったといえる。

ある六月のはじめの午後も、彼女は同じように座っていた。窓からは日がおどりこみ、斜面の下の果樹園は、うすモモ色の花の盛りで、無数のミツバチがブンブン飛んでいる。アボンリーでは、「レイチェル・リンドさんのご主人」で通っているトーマスは、柔和な、小柄な人で、納屋のむこうの丘の畑で、おそまきのカブラの種蒔きを

## 11. 曾野綾子訳

していた。マシユー・カスバートも、「グリーン・グレイブルズ緑のきりづま」屋敷のむこうの小川ぞいの赤土の広い畑に、カブラを蒔くはずであった。

ところが、この忙しい日の午後三時過ぎに、マシユー・カスバートは、悠々と馬車で窪地から丘をのぼってきた。真っ白いカラーと、よそゆきの背広を着ているところを見ると、アボンリーからどこかへ出掛けるつもりとみえる。クリ毛の馬をつけた馬車でいくのだから、かなり遠くへ行くのに違いない。マシユー・カスバートはどこへ、何をしに行くのだろう。

これがアボンリーの他の男だったら、レイチェル夫人はあれこれうまく考えあわせて、この二つの疑問に答をだしてしまえそうであった。ところがマシユーは、滅多に家から離れないのである。よくよくのことがあったと思うほかはない。彼はひどく内気で人中へ出たり、話をしなければならぬ席へ出ることを嫌がっていた。

「お茶が済んだら、『グリーン・グレイブルズ緑のきりづま』へ行つて、マシユーがどこへ、何しに行つたか、マリラから聞きだしてこよう。」

と、レイチェル夫人は考えを決めた。

「この忙しいのに町に行くはずはないし、第一あの人は、ひとを訪ねるなんてことはしつこないんだから。もしカブラの種を買い足すにしても、馬車でめかしこんでいく

はありませんが、愛らしい部屋を見て、せまい階段を降りて行くうちに、「アンは物語の中にいるだけで、グリーンゲイブルズのこの家にある名前入りのブラシも壁飾りもつくりものなのだ」という考えは消えてしまいます。アンはそれくらい親しく、わたしたちの心のおくに棲んでいるのです。

世界文学の玉手箱⑤

赤毛のアン

1992年12月1日 初版印刷

1992年12月10日 初版発行

著者 モンゴメリー

訳者 曾野綾子

発行者 清水 勝

発行所 河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷 2-32-2

電話 (03)3404-1201(営業) 3404-8611(編集)

振替 東京 0-10802

装幀 渡辺和雄

装画 山本容子

印刷・製本 凸版印刷株式会社

落丁・乱丁本はおとりかえます。  
定価はカバー・帯に表示してあります。

Printed in Japan ©1992

ISBN4-309-46555-2

1. レイチェル・リンド、びっくりする

レイチェル・リンドは、アボンリーの村を通る街道が丘を下っていったところにある、小さな窪地に住んでいる。まわりをハンノキやフクシアに囲まれたその小さな窪地を、はるかかなたのカスバート家の森の奥で生まれた小川が横切っている。

人の話では、小川は森の中を流れているあいだは、思わぬところで深く激んだり、滝のように流れ落ちたりと、入り組んだ急流なのだそうだが、リンドの窪地と呼ばれているその小さな窪地にたどりついたときには、よそ見もしないで静かに流れるせせらぎに変わっていた。小川でさえ、ミセス・リンドの家の前を流れるときは、上品に、行儀よくふるまわなくてはならないのだ。

ひょっとすると、小川はミセス・リンドが窓辺にすわって、小川だろうと、子どもだろうと、外を通るものすべてに目を光らせているのを、知っているのかもしれない。おかしなものや場ちがいなものが目に入ったが最

レイチェル・リンド、  
びっくりする



父と母の思い出に捧げる

後、どうしてなのか、なぜなのかをはっきりさせるまでは、ミセス・リンドの気は休まらないのだ。

アボンリーの村にかぎらず、世の中には、自分のことはほったらかしにしても、他人さまの問題に首をつっこみたがる人がいくらでもいる。いっぽう、自分の仕事は仕事で片付けたうえで、他人さまの問題にまで目を配れる才能のある人もいるものだが、ミセス・リンドはそういう人のひとりだった。

ミセス・リンドはまず、主婦としては折り紙つきだった。日常の家事をこなすどころか、人並み以上にやっつめた。村の裁縫の集いを文字どおり切りまわし、日曜学校の運営に手を貸したうえ、教会婦人会や国外伝道後援会にとっては、なくてはならない人だった。

それだけのことをやっつてのけながら、ミセス・リンドにはまだ、台所の窓辺にすわって木綿のキルトを作りながら——アボンリーの主婦たちが驚きと尊敬をこめていうように、十六枚も作ったのだ——窪地を横切って少し先で赤土の急坂になっている街道に、目を光らせている時間がたっぷりあった。

アボンリーの村は、セントローレンス湾につきでた小さな三角形の岬にあって、両側を海に囲まれている。村

## 12. 掛川恭子訳

にやってくる人も、村から出ていく人も、この丘越えの街道を通らなくてはならないから、自分では気がつかないうちに、ミセス・リンドのなにひとつ見逃さない監視の目にさらされる羽目になるのだ。

六月初めのある午後、ミセス・リンドはいつものように窓辺にすわっていた。あたたかな日の光がまぶしくさしこんでいた。ちょっと斜面を下ったところにある果樹園では、恥ずかしげに赤く染まった花嫁の頬のような淡いピンクの花が咲き乱れて、ミツバチの歌声があふれていた。

トーマス・リンド——小柄なおとなしい男で、アボンリーではレイチェル・リンドのご亭主でおおっていた——は、納屋のむこうの斜面の畑で、遅まきのカブの種をまいていた。マシュー・カスバートも、少し先のグリーン・ゲープルズのそばを流れる小川ぞいの赤土の広い畑で、種まきをしているはずだった。ミセス・リンドにはわかっていた。まえの日の午後遅く、カーモディーのウィリアム・J・ブレアの店で、マシューがビーター・モリソンに、明日の午後はカブの種をまくつもりだといっているのを聞いたのだから。マシューが口を開いたのは、もちろん、ビーターがきいたからだ。マ

そういうマシューが、白いワイシャツでめかしこんで、馬車で出かけることなど、そうめったにあることではなかった。

さすがのミセス・リンドにもいくら考えてもなにもわからなかったので、せっかくの午後の楽しみも台なしになってしまった。

「お茶がすんだら、グリーン・ゲープルズに行って、マシューがどこへなにをしいったのか、マリラにきいてみるしかなさそうだわね」律義なミセス・リンドは、最後にはそう決心した。「マシューは、普通この時期には町に出かけやしないし、だれかの家に遊びに行くなんてまねは、金輪際しない人だもの。カブの種が足りなくなっただったら、あんなにめかしこんで馬車で出かけたりはしないし、医者を呼びにくようなスピードじゃなかったし。これはまちがいはなく、昨日の夜になって、今日マシューが出かけなくてはならないようななにかが起こったんだ。まったくわけがわからない。なにが起こってマシュー・カスバートがアボンリーから出ていったかわかるまでは、とてもじっとしてられないわ」といいうわけで、お茶がすむと、ミセス・リンドは家であとにした。それほど道のりではなかった。カスバー

シュー・カスバートは生まれてこのかた、自分のほうから話を切りだすことなどあったためしなかった。

自分の口からそういったというのに、そのマシュー・カスバートが、この忙しい時期の午後の三時半に、窪地を通りぬけ、坂道をのぼって、落ちつきはらって馬車を進めていくのだ。それどころか白いワイシャツに、よそいきの背広まで着こんでいる。それだけ見ても、マシューがアボンリーの外へ行くとうとしているのは確かだった。おまけに、栗毛の雌馬に引かせた馬車に乗っている。ということは、かなり遠くまで行こうとしているのだ。いったいぜんたい、マシュー・カスバートはどこへ行くのだろうか？ なにをしいくのだろうか？

これがアボンリー村のほかの男だったら、ミセス・リンドはあれやこれやつなぎあわせて、どこへなにをしいくのかわからない見当がつけられただろう。けれど、まず家を離れることのないマシューが出かけていくのだから、よほど差し迫った、容易ならぬことが起きたのだろうということくらいしかわからなかった。マシューはこの世にふたりといないくらい内気な男で、知らない人の中や、口をきかなくてはならない場所に出るのを、毛ぎらいしているのだ。

ト兄妹が住んでいるのは果樹園に囲まれた大きな家で、リンドの窪地からは、ほんの四分の一マイルほどだった。ただし街道をそれだから家までの小道が長いので、実際にはそれよりかなりあった。

マシュー・カスバートの父親は息子と同じくらい内気で無口な人だったから、できれば森の奥に引っこんでしまいたいところだったが、そうもいかないのが、村の連中からなるべく離れた場所を選んで家を建てたのだ。グリーン・ゲープルズはカスバートが切り拓いた土地の一番奥に建てられて、今でもそのまま同じ場所に建っている。だからほかのアボンリーの家々は街道ぞいに仲よく建ち並んでいるのに、グリーン・ゲープルズは街道からはほとんど見えなかった。ミセス・リンドにいわせるのと、そんなところで暮らしているなんて、とても暮らしているうちに入らないのだそうだ。

「こんなのは、ただここにいて、ただだけでしょうに」ミセス・リンドは、野バラが両側に咲き乱れ、馬車の車輪の跡が深く残っている、草の生えた小道を歩きながらいった。「こんなところに引っこんで、ふたりつきりて暮らしているんだもの、マシューとマリラがちょっと変わり者なのもうなずけるってもんだわ。木じゃ、話し相

新島書店蔵書



完訳クラシック 赤毛のアン 1  
赤毛のアン

1999年5月20日 第1刷発行

2008年9月26日 第9刷発行

【作者】

L. M. モンゴメリー

【訳者】

掛川恭子

【発行者】

野間佐和子

【発行所】

株式会社講談社

〒112-8001 東京都文京区音羽2-12-21

電話 出版部03-5395-3535 販売部03-5395-3625 業務部03-5395-3615



【印刷所】

豊国印刷株式会社

半七写真印刷工業株式会社

【製本所】

大口製本印刷株式会社

©Yasuko Kakegawa 1999 Printed in Japan N.D.C.933 314p 19cm  
落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。

送料小社負担にてお取り替えます。

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き禁じられています。

定価はカバーに表示してあります。

この本についてのお問い合わせは、児童図書第一出版部あてにお願いいたします。

ISBN4-06-270401-3

Anne of Green Gables  
by Lucy Maud Montgomery

【イラストレーション】

石橋富士子

【ブックデザイン】

鈴木成一デザイン室



### 第1章 レイチェル・リンド夫人がびっくり仰天する

レイチェル・リンド夫人の家は、アヴォンリー(1)の村道が急な下り坂となつて降りきつた谷間にたつていた。この谷間は、まわりを榛の木と、鳳仙花(2)にくるりととりまかれていて、その真中には細い川が流れている。この流れは、もとはといえは、森の中にあるカスパート家の古い屋敷のあたりで湧き出している泉が源流だ。この流れときたら、森の中にある間はまるでひねくれ者のきかん坊で、やたらにうねうねと曲がりくねりながら流れてくる。しかも深い樹々の翳(かげ)のあいだには、たくさんのほの暗い瀧や陰険な水たまりを、ひそめ隠しているというもつぱらのうわさだ。しかしリンド邸の谷間(3)のあたりにまできたときに、この荒くれ者はとても馴(な)れよのよいせせらぎに変わってしまう。(4)レイチェル夫人の家の前を行きすぎるときには、小川ですらお行儀よくとり澄ましていなければならぬのだろうか？ そう、小川にだつてちゃんと分かっている。レイチェル・リンド夫人はいつも窓辺に座つて、小川や子どものことにはじまり、何から何にいたるまで目を鋭く光らせているのだ。そして、奇妙で腑(ふ)におちないことがある、なぜそうなっているのか原因がはつきりするまでは、追求の手を休めることがない。

アヴォンリーの周辺には、ご近所の人の世話を焼いてやろうという心がけは立派ながら、肝心の自分



「清新な乙女」サー・ジョン・エヴェレット・ミレイ、1881年、カリフォルニア大学ロサンゼルス校、芸術文化センターのアーマンド・ハマー記念博物館内、アーマンド・ハマー・コレクション所蔵。

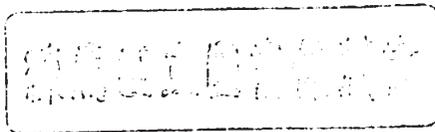
の仕事の方はさっぱりお留守になつていゝ人々がとても大勢いた。しかしレイチェル・リンド夫人はそのような連中とは一味も二味もちがつていた。彼女は自分の仕事をこなした上で、なおかつ他の人々の面倒をもみようという、やり手の女性なのだ。まずもつて彼女は有能な主婦だ。行なうべき仕事はきちんとこなすばかりか、彼女の手にかかれればすべてが完璧だつた。それに彼女は「裁縫クラブ」をやつてゐる。また日曜学校の運営を手伝つてゐるばかりか、「援助婦人会」、それに「海外伝道援護会」の活動をささえる最有力メンバーでもあつた。しかも、これだけの仕事をかかえながら、レイチェル夫人にはまだ時間がありあまつてゐるらしかつた。というのも、彼女が毎日何時間も台所の窓辺に腰をおろして、「綿の燃糸」でキルトを編みながら——すごい作品をレイチェル夫人はもう十六も完成したそうなの……と、アヴォンリーの主婦たちは畏怖の声をあげてささやきあつたものだが——鵜の目鷹の目で見張つてゐるのだ。レイチェル夫人の目の前で、道路は窪地を向こうまで横切り、最後に赤い丘の急坂をうねうねとのぼつてゆく。アヴォンリーはセントローレンス湾に突き出ている小さな三角形の半島の上であり、両側が海になつてゐるので、アヴォンリーに行つたり、そこを後にしようと思えば、誰だつてこの丘の道を通らざるをえない。そうすることで、通行人の方ではそれとは知らずに、レイチェル夫人の針のように鋭い目に挑戦状を叩きつけてゐるということになるわけであつた。

六月の初めのある午後のこと。例によつてレイチェル夫人は窓辺の席に座つてゐた。窓からはぼかぼか々と眩いばかりの日光が差し込んでくる。家から低く下つてゆく斜面の果樹苑では薄いピンクの花が満開となり、一面に花嫁のベールをかぶつたかのような風情。そして、その上には無数の蜜蜂が舞い飛んでゐた。トマス・リンドは——アヴォンリーでは通常「レイチェル・リンドのご亭主」で通つてゐる、小柄でおとなしい人物だつたが——いま晩生の蕪の種を、納屋の向こうの畑にまいてゐるところだ。そしてマ

シュー・カスバートも、はるかむこうの緑破風館の広い赤土の畑で同じように種まきをしてゐる……はずだつた。そんなことをレイチェル夫人がどうして知つてゐるのかというと、昨日の夕方、カーモディ(8)のウィリアム・J・ブレアの店でマシューがピーター・モリソンにむかつて、明日の午後は蕪の種をまくつもりだなどと話してゐるのを耳にしたからに他ならない。え？ マシューがそんなこと話すなんて珍しくて？ いやいや、もちろんピーターの方から訊いたのに決まつてゐる。マシューが自分から進んでそんな話をするなんてことは、生まれてこのかた一度だつてありはしなかつた。

なのに、今こんなところにマシューがゐる！ 忙しいはずの今日という日の、しかも午後三時半という時間に！ ほらあそこ、涼しい顔をして馬車にのつたマシューが谷を横切り、丘の道を上がつて行くではないか！ おまけに、マシューは白襟をつけ、いちばんの晴れ着をまとつてゐる。これはマシューがアヴォンリーの外に出かけていくという、明白な証拠だ。しかも、くり毛の雌馬に四輪馬車(9)を牽かせてゐる……ということ、かなり遠くまで行くつもりだな……さあ、マシュー・カスバートはどこに行くのだろうか？ いったいどんな用があるのだろうか？

これが同じアヴォンリーの男でもマシューでなければ、レイチェル夫人はあれこれの事情を抜け目なく考えあわせた上で、この疑問の答えを的確に推測することもできただろう。しかし、マシューが家を離れることはきわめて珍しかつたので、こうして出かけるからにはよほど異例な急用が生じたにちがひなかつた。およそ世の中にこのマシューほど恥ずかしがり屋の男はいない。知らない人々の間に行つたり、口をきかなければならないようなところに行くのは、マシューは大嫌いだつた。したがつて、マシューが白襟をびしつときめて盛装し、四輪馬車で出かけようなどというのは、そうそう見られる光景ではなかつた。レイチェル夫人はいくら考えてみてもわけが分からなかつた。今日の午後はこれでもうすつかりだ



かんぜんばん しかけ  
完全版・赤毛のアン

●  
1999年11月25日 第1刷

著者……………L・M・モンゴメリ

訳者……………山本史郎

装幀者……………渋川育由

発行者……………成瀬雅人

発行所……………株式会社原書房

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-25-13

電話・代表03(3354)0685

振替・00150-6-151594

本文組版・印刷……………株式会社ディグ

カバー印刷……………株式会社同美印刷

製本……………小高製本工業株式会社

ISBN4-562-03261-8 © 1999, Printed in Japan

◆著者◆

L・M・モンゴメリ L. M. Montgomery

1874年カナダのプリンスエドワード島に生まれる。2歳たらずの時に母親を失い、母方の祖父母に育てられる。早くから文学的才能がめばえ1890年ごろから新聞・雑誌に詩などを発表し、1896年以降は教師として学校で教えるかたわら、小説を書く。1905年に構想を得た長編の処女作「赤毛のアン」が1908年に出版されるとたちまちベストセラーとなる。1911年牧師のイーワン・マクドナルドと結婚、牧師夫人としての活動のかたわら、アンシリーズをはじめとして、続々と作品を発表した。1942年没。

◆編者◆

ウェンディ・E・バリー Wendy E. Barry

テネシー州ナッシュビル在住の研究者、詩人。

マーガレット・アン・ドゥーディ Margaret Anne Doody

ヴァンダービルド大学の英文科教授。

メアリー・E・ドゥーディ・ジョーンズ Mary E. Doody Jones

文化史、文学史を研究するフリーの研究者。

◆訳者◆

山本史郎（やまもと・しろう）

1954年、和歌山県に生まれる。1978年に東京大学教養学部教養学科を卒業。現在、東京大学大学院総合文化研究科教授。専攻はイギリス19世紀文学。翻訳に、「ネルソン提督伝」、「図説アーサー王物語」、「図説アーサー王伝説事典」、「図説アーサー王の世界」、「ホビット」、「図説ケルト神話物語」、「女王エリザベス」上・下、「トールキン・仔犬のローヴァーの冒険」、「ケルト妖精物語」I & II、「絵物語ホビット」（以上原書房）「アンティゴネーの変貌」（共訳、みすず書房）がある。

限らず、どこにでもいるが、レイチェル・リンド夫人は、自分の用事はもちろん、人の世話まで立派に手がまわるやり手だった。彼女は切りもりのうまい主婦で、家事は何でもそつなくこなすうえに、裁縫の集まりを開き、日曜学校を手伝い、教会援護会と海外伝道後援会の顔役でもあった。それなのに、さらに台所の窓ぎわに何時間もすわって木綿糸でベッドカバーを編んでいる(3)余裕があった。「十六枚も作ったんですって」と、アヴォンリーの主婦たちは感嘆しつつ噂しあったものだった。しかもリンド夫人は、縫物をしながら、窪地からむこうの丘へとうねうねと続く赤土の街道にも目を配っていたのだから、大したものだった。アヴォンリーは、セントローレンス湾(4)につきでた三角形の半島に位置している。半島の両側は海だから、村への出入りには、この丘を越えなくてはならない。つまり、すべてを見通すリンド夫人の監視に、必ずさらされなければならなかった。

六月初めのある昼下がりに、いつものように彼女はすわっていた。窓からは温かく明るい陽ざしがあふれ、家の下の斜面に広がる果樹園では、花嫁の頬の紅らみのような薄い桃色の花が咲き、蜂が、ぶんぶん羽音を立てて飛びまわっていた。

トーマス・リンドは小柄なおとなしい男で、そのせいかどうか、世間では「レイチェル・リンドのご主人」と呼ばれていた。彼は納屋のむこうの丘の畑で、遅まきのカブの種をまいていた。

そしてマシュー・カスバート(5)も、「緑色の切妻屋根」(6)と呼ばれる家のそばを流れる小川にそった広い赤土の畑で、遅まきのカブをまき終わっているはずだった。というのは、

## 第1章 レイチェル・リンド夫人の驚き



レイチェル・リンド(1)夫人は、アヴォンリー(2)の街道が、小さな窪地へとゆるやかに下っていくあたりに住んでいた。まわりには、ハンの木や、淑女の耳飾りと呼ばれる野生のフクシアの花がしげり、そして、カスバート家の古びた屋敷のある森から流れてくる小川が横切っていた。

この小川も、森の奥深くの上流には思いがけない深い淵や滝があり、曲がりくねっていたり荒々しかったりするという話だが、リンド家の窪地に流れつく頃には、静かで、まことに行儀のよろしい、可愛らしいせせらぎになっていた。

というのも、リンド夫人の家の前を通る時には、川の流れですら、体裁とか礼儀作法を忘れるわけにはいかなかった。何しろ彼女は、いつも窓辺にすわって、小川から子どもにいたるまで、通るものすべてに目を光らせていて、どこか妙だとか、しっくりこないと感じたら最後、どうしてそうなのか、わけをつきとめずにはいられない。多分、小川の方でも、それを心得ているのだろう。

自分のことは等閑にして、ひとの事に首をつっこむお節介な連中は、ここアヴォンリーに

アヴォンリー街道をだらだらと下って行くと小さな窪地に出る。レイチエル・リン  
 ド夫人はここに住んでいた。まわりには、榛の木が茂り、釣浮草の花が咲き  
 競い、ずっと奥のほうのクスバート家の森から流れてくる小川がよこぎっていた。森  
 の奥の上流のほうには思いがけない淵や、滝などがあつて、かなりの急流だそうだが、  
 リンド家の窪地に出るころには、流れの静かな小川となっていた。それというのも、  
 レイチエル・リンド夫人の門口を通るときには、川の流れでさえも行儀作法に気をつ  
 けないわけにはいかないからである。リンド夫人が窓ぎわにすわり、小川からこども  
 にいたるまで通行のもの全部にするどい監督の目を光らせていて、ちよつとでも腑に  
 おちない点やふつごうなところを見つけたが最後、その理由を根ほり葉ほり、さぐり  
 ださずにはおかないということを、川の流れのほうでもわきまえていたのかもしれない。

## 第一章 レイチエル・リンド夫人の驚き

天空の導きの星が汝の運命を定め、  
 活気と火と露もて汝の魂を創り給いし

—ブラウニング

自分のことはそつちのけにして他人の世話ばかりやいている者は、アヴォンリーにかぎらずどこにもいくらでもいるが、レイチェル・リンド夫人は自分の始末はもちろんのこと、そのうえに、他人の世話までやくだけの腕前をもっていた。主婦としての手腕はたいしたもので、何でも手際よく、人並み以上にやつてのけた。裁縫の集いの中心ではあるし、日曜学校の経営から外国伝道婦人後援会の重鎮といったぐあいでありながら、しかもなおお時間でも台所の窓下にすわって、木綿のさしこのふとんをさす余力があった。「十六枚もつくったんだとさ」とアヴォンリーの主婦たちは声をひそめて話しあうのだった。それもその間じゅう、この窪地からずつと向こうの赤い丘の急な斜面までうねうねとつづいている街道のほうへ、たえず目をくばりながらの仕事だから驚きいったものである。アヴォンリーはセント・ローレンス湾につきでた三角形の小さな半島を占めており、両側に水をひかえているので、ここからは出て行く者もはいつてくる者もかならずこの丘の道を越えなくてはならないので、しよせん、リンド夫人のぬけめのない監視をのがれることはできなかった。

ある六月のはじめの午後のこと、リンド夫人はこうしてすわっていた。窓からは陽がさんさんとさしこみ、坂の下の果樹園には、うすもも色の花が一面に咲きひろがり、無数の蜜蜂がぶんぶん飛びまわっていた。トマス・リンドは——おとなしい小がらな

男で、アヴォンリーの人々から「レイチェル・リンドのご亭主」と呼ばれていたが、その男が納屋の向こうの丘の畑でおくての蕪をまいていた。マシユウ・クスバートは『緑の切妻屋根』の向こうの、広い赤土の畑の蕪はまいてしまったらしかった。前の日の夕方、カーモディのウィリアム・ジューブレアの店でピーター・モリソンに向かって、明日の昼すぎにまくつもりだとマシユウが話したのをリンド夫人はちゃんと聞いていたのだからまちがいはない。むしろその話もピーターのほうからたずねたからであつて、マシユウから何かきりだすなどということは、これまでにただの一度もなかった。

それなのにこの忙しい日の午後の三時半という時間に、マシユウ・クスバートはゆうゆうと窪地をぬけて丘を上って行くのである。そのうえに白いカラーと、取っときの外出を着こんでいるところを見ると、どこかよそへ行くことは明らかだった。栗毛の牝馬をつけた馬車を駆っているからには、かなり遠方へ行くにちがいない。いたい、どこへ、何のために行くのだろう。

これがほかの男ならアヴォンリーのだれであろうとリンド夫人は、あれこれと巧みに考えあわせて、この疑問を二つともかなりうまく当ててしまうのだった。しかしマシユウときたらめつたに家をはなれないから、これは何か急な異変があつたにちが

Title : ANNE OF GREEN GABLES

Author : Lucy Maud Montgomery

あか げ  
赤毛のアン

—赤毛のアン・シリーズ1—

新潮文庫

モ - 4 - 41



平成二十年二月二十五日発行  
平成二十年五月三十日二刷

訳者 村岡花子

発行者 佐藤隆信

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二一八七一  
東京都新宿区矢来町七一  
編集部(〇三)三三六六一五四四〇  
電話 読者係(〇三)三三六六一五一  
<http://www.shinchosha.co.jp>

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付  
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・錦明印刷株式会社 製本・錦明印刷株式会社

© Mie Muraoka 1952 Printed in Japan  
Eri Muraoka

ISBN978-4-10-211341-7 C0197

## 第二章 レイチエル・リンド夫人のおどろき

アヴオンリー街道をだらだらとくだつていくと、小さな窪地に出ます。ここにレイチエル・リンド夫人は住んでいます。

まわりには、榛の木がしげり、ずっと奥のほうのクスバート家の森から流れてくる小川がよこぎっています。

森の奥の上流のほうには、思いがけない淵や、滝などがあつて、かなり流れがはげしいようですが、リンド家の窪地に出るころには、静かな小川になっていました。

それというのも、レイチエル・リンド夫人の門口を通るときには、川の流れてさえも、行儀よくしないではいられなかつたからなのでしょう。

リンド夫人が窓ぎわにすわつて、小川から子どもにいたるまで、道を通りすぎていく全部の人に、するどい監督の目を光らせていて、ちよつとでも不思議に思うことや、不都合なことを見つけると、そのわけを根ほり葉ほりさぐりださずにはおかないということを、川のほうでもちゃん

と知つていたのかもしれない。

世の中には、自分のことはそつちのけにして、他人の世話ばかりやいている者はたくさんいますが、リンド夫人は、自分の始末はもちろんのこと、そのうえに、他人の世話をやく腕前をもつていのです。

家のことは、もうしぶんなくきちんとやつてのけますし、裁縫は人なみすぐれてじょうずなうえ、日曜学校のことから、外国伝道婦人後援会の幹事までしているのです。

そのうえ台所の窓下にすわつて、窪地から、むこうの赤い丘まで、うねうねとつづいている街道を、するどい目で見はりながら、何時間でも、木綿のキルトのふとんを作るゆとりがあるので、すから、まつたく、おどろきいっただけです。「十六枚も作つたんだとき。」と、アヴオンリーの主婦たちは声をひそめて、話しあうのでした。

アヴオンリーは、セントローレンス湾につきでた小さな半島をしめていて、両側に水をひかえているので、ここから出入りする者は、かならずこの丘の道をこえなくてはなりませんから、リンド夫人のぬけめのない目をのがれることはできないのでした。

ある六月はじめのことです。いつものように、リンド夫人は窓下にすわっていました。窓からは明るい日がさしこみ、坂の下の果樹園には、うすもも色の花が咲きひろがり、たぐさ

んのみつばちが楽しげに飛びまわっていました。



# 緑の切妻屋敷のアン

(赤毛のアン)

L・M・モンゴメリー

第1章 レイチエル・リンド夫人、仰天する

レイチエル・リンド夫人は、エイヴォンリー街道がちょうど小さな谷間に入り込む、ハンノキやツリフネソウに縁どられた、はるかカスバート家の古い地所の森を水源とする小川が横切るあたりに住んでいた。この川は、

源近く、森を通るあいだは、入り組んだ、やたらせっかちな川と称され、深みや滝といった暗い秘密を抱えていると言われていたが、リンド谷まで下ってくるころにはもう、大人しい、お行儀のいい小川になっていた。何しろ、たとえ小川であっても、礼儀作法をきちんと踏まえずにレイチエル・リンド夫人の玄関の前を通ることは不可能なのだ。ミセス・レイチエルが窓辺にすわって、小川にはじまって飛びまわる子どもたちに至るまで、通りがかるすべてのものに鋭い目を光らせ、何



Anne of Green Gables 1908  
Lucy Maud Montgomery 1874-1942

もちろん世界的に読まれている本だが、とにかく日本での人気はすごい。英語版ウィキペディアの「赤毛のアン」の項も、わざわざ一段落を割いて日本での人気について語っている。「1952年以来、日本全国の学校のカリキュラムにも組み込まれている」とまで書いてあって、そうなの？と首をかしげてしまうのですが。この冒頭で出てくる真面目一本槍のおばさんが、アンが悲愴感を漂わせ（たつもりで）あまりに仰々しい物言いをするものだからこらえきれずに笑い転げるシーン、あそこがこの本で一番好き。

か妙なものを、場違いなものを見かけようものなら、その謂れ因縁を探りだすまでけつして心安まら  
ないことを、小川もおそらく意識していた。

周りの人たちのやることにあれこれ口を出せるのは、自分がやるべきことをまるつきりお留守に  
しているからという人ならエイヴォンリーにもよそにも大勢いる。だがレイチエル・リンド夫人は、  
世に時おり存在する、自分の暮らしをきちんととのえた上で、他人の暮らしまでとのえてしま  
える有能な人物だった。主婦としても一流であり、為すべき仕事はつねに、かつ上手に為した。縫  
い物会を運営し、日曜学校の運営を手伝い、教会援助会と海外伝道支援団の一番の柱でもある。に  
もかかわらず、それだけいろんなことに携わっていても、台所の窓辺に何時間も陣どるじゅうぶ  
な余裕がミセス・レイチエルにはあった。窓辺にすわって、「木綿燃糸」のベッドカバーを編みつ  
つ——これまでに十六のベッドカバーを編みおえたことを、エイヴォンリーの主婦たちは畏敬の念  
をこめた声で語った——谷間を横断して彼方の険しい赤い丘をくねくねのぼっていく街道に、いつ  
も鋭い目を光らせている。エイヴォンリーはセントローレンス湾に突き出た、小さな三角の半島を  
占めていて、両脇は海だったから、そこから出入りする者はみなその山道を通るほかなく、したが  
つてかならず、ミセス・レイチエルの何ひとつ見逃さぬ視線にさらされることになるのだった。

書き出し「世界文学全集」

★

二〇一三年八月二〇日初版印刷  
二〇一三年八月二〇日初版発行

編者★柴田元幸

装幀★岩瀬聡

表紙★古屋智子

手書きフレイム★大塚砂織

発行者★小野寺優

発行者★株式会社河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷二二二二一  
電話★〇三三四〇四一一〇一【営業】〇三三四〇四一八六一【編集】

<http://www.kawade.co.jp/>

組版★KAWADE DTP WORKS

印刷★三松堂株式会社

製本★小高製本工業株式会社

Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取り替えいたしません。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、いかなる場合も著作権法違反となります。

ISBN978-4-309-20630-1